

『いのちとからだの10か条』 のメッセージに沿った 絵本を制作

会報誌302号(2015年10月)のCOMLメッセージで理事長の山口育子が紹介しましたが、バイエル薬品株式会社には社員が患者の視点を学ぶためのプログラム「ベターライフイニシアティブ」(BLI)という活動があります。その一環として2015年に山口を講演に呼んでいただき、大阪や東京、滋賀で計12回にわたり患者・市民が参加できる医療に関連した活動(そのなかにはCOMLが独自におこなっている活動内容も)などを紹介し、ワークショップをおこないました。BLIには自主的に企画されたプログラムも併存しており、あるチームが、COMLが制作・発行している子どもの『いのちとからだの10か条』のメッセージに沿った絵本を作りました。その経緯や想いなどについて、チームの中心メンバーである小島留奈さんと松原正さんにお話を伺ってきました。(まとめ 村上朝子)



小島留奈さん(右)と松原正さん

●絵本を作ろうと思った背景

バイエル薬品のコングレスマネジメント(16年当時)という部署でBLIコーディネーションを務めていた小島さんはBLIについて、「通常は顧客に触れ合う機会の少ない業務に従事している社員を対象に、『私たちは何のために仕事をしているのか』という意識を高めるために始めたもので、社員教育的な色合いが強い取り組みです。さまざまなプログラムがありますが、講義を受ける座学だけでなく、自分たちで何ができるか考え、それに積極的に取り組むというプログラムも数多くおこなっています」と話します。

バイエル薬品は以前、血友病の子どものための絵本を制作したことがありました。治療のための注射を怖がる子どもに対し、怖がらずに受けてもらうことを目的とした絵本でした。小島さんによると、絵本では、「かた丸く

ん」という忍者のようなキャラクターが出てきて、注射をするとその「かた丸くん」が体内に入って守ってくれるというお話だったそうです。

小島さんは当時その本を読み胸を打たれました。山口の講演で『いのちとからだの10か条』の話を聞いたとき、その両者が結びついたと言います。小島さんは「『いのちとからだの10か条』に込められているメッセージと絵本を合体させることができるのではないかとひらめきました」と話します。そこでチームのメンバー(現在は10名)に相談したところ、全員から賛意を得て、具体的に動き出すことになりました。

●専門学校との産官共同プロジェクト

作家を見つけるのもそれほど苦労はしなかったそうです。チームのメンバーの知り合いに、創造社デザイン専門学校の講師の方がいたのです。「じつはこの専門学校はバイエル薬品から歩いて行ける距離にあり、何か運命的なものを感じました」と小島さん。専門学校のほうでもちょうど産学共同プロジェクトに力を入れているところだったので、お互いに好都合の出会いでした。

コングレスマネジメントのマネジャーを務める松原さんは、「専門学校では、学生が社会に出た際、持っている技術がどのように社会のニーズとつながるのか、活かすことができるのかを産学連携でつかむという体制があったのです。そこで、卒業テーマとして取り組んでいたことになりました。山口さんに『いのちとからだの10か条』について直接学生さんに話していただき、主旨をよく理解したうえで、「ぜひやりたい」という学生さんが

応募してくれました」と経緯を説明します。

そして、9人が作成したラフ案(大まかな構想案)のなかから最終的に4作品を選びました。「今回は、いそまみのりさんの『つぎのかたどうぞ〜』を本として完成させましたが、ほかの3作品も制作途上にあり、今後、電子媒体なども含め、広く読んでいただける形にしたいと考えています」と松原さんは言います。

選考にあたりかなり厳しい基準を設けたそうです。「まず、『いのちとからだの10か条』に込められているメッセージに沿っていること。また、子どもが診察室に入る前、待合室で待っているときに元気をもらえるような内容、というのにこだわりました。そもそも絵本にしたかったのは、知識を得る冊子ではなく、そこに感動がある、心の動きを得られるものがいいと思ったからです。ですから、子どもが読んで楽しいものという視点で選びました」と小島さんは話します。

松原さんは「病院が怖い、お医者さんが怖い、という子どものハードルを取り除きたいと思いました。そして、自分の言葉で症状を伝えてほしいという気持ちもあります。私自身薬剤師なので、自分の子どもが小さかったとき病院に連れていくと、ついつい私が医師に子どもの症状を話していました。でも子ども自身が自分で伝えるほうが本来は正しく伝わるはずだし、自分で伝えるように促すのが親の役目だったと反省しています。そのガイドンスとしてこの『つぎのかたどうぞ〜』が一番適しているのではないかと思います」と話します。そして、「専門学校でもデザインの先生とストーリーの分野の先生とお二人がかかわってくださったので、クオリティの高い作品に仕上がったのではないかと思います」と述べました。

小島さんは、「本ができあがって、『こんな立派ないい本ができるなんて』という気持ちと『必ずできると思っていた』という気持ちの両方があります」と話します。「通常の仕事をしながらの取り組みで大変だったのではと言われますが、皆さんの想いがつながついていき、伝えたことが2倍、3倍になって返ってくることもありました。皆のところに届くことは共感が得られるということを知り、どんな仕事をするときでも大事にしないでほしいと感じました」。

●配布は手渡しで

制作した500冊の本は、おもに病院や診療所の待合で手に取ってもらうことを念頭に置いているようですが、松原さんは、医療者に直接手渡ししたいと話します。「配布の方法ですが、私たちが直接医師と会うイベントが年間約50回あります。そういう機会に出店して、主旨を表示し、興味を示してくれる医師に直接手渡ししたいと考えています。今年一年かけて取り組みたいと思います。当初は、私たちの医薬情報担当者を通じて配布することも考えましたが、私たちの意図を理解していただきたいので、制作にかかわったスタッフが直接手渡すことにしたのです。そうすれば、単に待合室に置いてある“一冊”、ではなくなると言えます」と話しました。

この絵本はCOMLが監修していることもあり、ホームページからもPDFでダウンロードが可能な状態にして紹介しています。子どもだけでなく、大人の方でも楽しんでいただける内容ですので、ぜひご覧ください。

